日本仏教における聖水
～真言宗のケーススタディ～

カリフォルニア州立大学アーバイン校　助教授
ダンカン・隆賢・ウィリアムズ

一九九八年に横浜善光寺育英僧の奨学金をいただいたこともあり、私はハーバード大学院の博士号を取得することが出来ました。そのご縁はこうじて、学術的に私が仏法を学ぶ場を得たり目標としていたゴールに到達出来ただけでなく、精神面でも多くを学び、内面を切磋することも可能としたのです。ハーバード大学院を卒業後、私は助教授としてカリフォルニア州立大学アーバイン校に勤務することとなりました。また、大学での教鞭に加え、ロサンジェルス周辺の仏教寺院で、布教活動の手伝いを行えればと願っています。私の博士号論文は、横浜善光寺と宗派を同じくする曹洞禅についてでした。徳川時代に発展した曹洞宗についての私の論文は、二〇〇三年にプリンストン大学出版社から出版される予定です。

Sacred Waters in Japanese Buddhism:A Case Study of Shingon Buddhism
Duncan Williams

その他に私が行ってきた研究をご紹介したいと思います。一つはBuddhism and Ecology（「仏教とエコロジー」）という本で、ハーバード大学出版社から一九九七年に初版されました。もう一つの本は、American Buddhism（「アメリカにおける仏教」）といい、カーゾン・プレス出版社から一九九九年に出ています。二〇〇二年から二〇〇三年の間は、カリフォルニア州立大学アーバイン校から一年の研究期間をいただき、日本に滞在しています。現在私は日本で、今後のテーマである、仏教と温泉の歴史を研究しています。

以下に記す論文は、まだ始めたばかりである新テーマの最初の論文です。このテーマを選ぶにあたり、私は国際仏湯会なるグループを主宰することを決断いたしました。国際仏湯会とは、仏教と関わりのある日本の古い温泉を訪ね、年に四回旅をして、仏教と温泉の意義が重なり合う世界を勉強するグループです。例として、現在までに選んだ地として、草津温泉、渋温泉、龍神温泉、肘折温泉、修善寺温泉、美ヶ原温泉などが挙げられます。今後行う最新の実地調査会として二〇〇三年の一月に、九州は別府温泉、湯布院温泉、黒川温泉、そして雲仙温泉を巡る計画を立てています。このテーマにご興味のある方は、私が会長を務めます、国際仏湯会のウェブサイトをぜひ訪れていただければと思います。www.buttokai.net

「聖水」は、世界のほとんどの宗教に見られる現象です。温泉や湖、海に宿る神は水に帰し、存在そのものを水に吹き込み、自然を超えた力を与えます。「聖水」は儀式や崇拝の対象になり、特別な力が宿っている為に普通の水とは一線を画します。宗教学における「聖水」の研究はかなり長い間行われていますが、この現象における研究は長い間、ユダヤ教、イスラム教、キリスト教、そしてヒンズー教でなされてきました。しかし「入浴」についての研究は、一般的には近年注目を浴びるようになりました。例を挙げるとイスラム教のハマーム、ユダヤ教の儀式にあるシュヴィッツとミクヴァ、ネイティブアメリカンのスウェットロッジと呼ばれるスチームバスがあります。またセブンスデー・アドベンティストや他のアメリカ宗教グループなどでも、入浴は行われています。

しかし実は仏教における「聖水」の役割や、宗教的観点からの入浴についての研究はほとんどなされていないのが実情です。この論文では特に真言宗に焦点を当てながら、入浴と日本仏教の伝統が交わる点に全体像を置きたいと思います。世界の三分の二の温泉が日本に存在し、日本人のお風呂好きも知られています。仏教の考えと習慣を非常に高度なお風呂文化に反映・発展させた日本では、その歴史の中、膨大な資料がしたためられました。そして東寺、醍醐寺などの具体的な寺湯と日本での風呂文化を創造した第一人者である、弘法大師空海の温泉発見伝説における役割を例に挙げ、清めと癒しという二つの柱を軸に説明していきたい

と思います。

入浴と仏教：浄化の文化

日本に仏教が入って来た時、入浴を通じて清めの文化が紹介されました。「仏説温室洗浴衆僧教」（別名「温室教」大正大蔵教七〇一）などの仏典は、身体を清めることにより心も清まるという教えに基づき、入浴を促しました。この観念は、身体の汚れを洗うことによって同時に精神的汚れ、つまりカルマをも洗い流すことになるという汎インドのものと関係しています。今日のヒンズー教で最も知られているこの習慣が、ガンジス川で見られる沐浴です。特に十三年に一度ガンジス川で行われるマーハークンブメーラ(Maha Kumbh Mela) という大沐浴は、前世から積み上げられてきたカルマを洗い流す力があるとされています。

日本では禊または潔斎と呼ばれる、清めの仏教以前の観念が存在します。神の目前に立つ前は、さまざまな種類の汚れを落とすものとし、宗教的想像と儀式の大切な役割を担っています。この汚れ落としはカルマを落とすものではないのですが、仏教以前と仏教の概念にある「清め」は、身体をきれいにするのは前もって必要とされる行為、もしくは精神をきれいにするという共通の観念なのです。

入浴と仏教：清めの文化

仏教が日本にもたらしたものといえば、日本人にとっての新しい興味としての洗浴です。その目的の為に、宗教

的な風呂の施設として温室が建設されました。エドワード・シェファー氏（Edward Schaeffer）が指摘した中国のケースのように、清めという仏教観念学は、元々僧や尼が修行中に使用していた寺湯の建造物がきっかけで、広く伝わることになったのです。それは特に東大寺、興福寺、唐招提寺のような大規模な寺院にとっては、建立（こんりゅう）する際に絶対必要な建物となっていったのでした。奈良時代初期、湯屋（ゆや）、大湯屋（おおゆや）、風呂、寺湯などと多くの名前で呼ばれていた寺院の湯殿施設は、修行僧や尼にのみ限定された場所でした（例えば儀式の前や神の前に立つ際、事前に自分を清める）。奈良時代初期、入浴とは、修行の一環として考えられていました。つまり、修行不足の僧侶は寺湯には入れなかったのです。さらには、川、湖、温泉などに浸ることと人間が建てた物に入浴することを対比すると、遡った初期の頃蒸し風呂にはいるというのは、仏教聖職者と貴族階級のみの特権でした。蒸し風呂か湯船を建設するには費用がかかり、さらにその維持費も高くつきました。特にお湯を作る薪は、市井の人にとって極端に値が張るものだったのです。

忙しい毎日の中でも、第二次世界大戦後の日本人は大のお風呂好きということは知られていますが、日本の長いお風呂の歴史の中ほとんどを通じ、実は入浴とは地域のものだったのです。現在私達が認識する公衆浴場もしくは銭湯とは、室町時代の間に発展し、徳川時代に人気が出ました。しかしその元祖というべき存在は奈良時代の寺湯にまで遡ります。奈良時代、そして平

安時代に一層その頻度は高くなったのですが、仏寺は元々聖職者に限定していたお風呂を「慈善事業」として庶民に開放したのです。この慈善事業は施浴と呼ばれる習慣に基づき、僧侶や貴族が庶民に寺湯を開放するため資金を出し、それによってこの世でのより良い人生、ひいては来世の救いも求めようとしたのでした。これらの風呂は施行湯や施行風呂、功徳湯、立願風呂などと呼ばれ、無料でどの階級の人達にも開放された為人気が出ました。その結果、仏教の清めという文化を普及させる重要な仕組みとなりました。施浴の観念は、他人の為、とりわけ乞食や社会的に不利な立場に立たされている人達をきれいにする場所を作ることを基に、それをきれいにすることにより自分自身のカルマを落とすという風に機能していました。最も知られている例では、聖武天皇の妻で、孝謙天皇の母であった、国分尼寺法華寺の光明皇后が挙げられます。伝説によれば、彼女はなんと千人もの人々を対象に、身体を洗う作業を行ったのです。貴族ながらも、実際にお風呂に入りに来た乞食や庶民の背中をこすることで、彼女はこの慈善行為に身を捧げたのです。千人目はハンセン病患者でしたが、光明皇后はその人の背中を嫌がらずに洗っただけではなく、皮膚から膿を吸い出したとさえ言い伝えられています。この有名な場面は「東大寺縁起絵巻」に描かれています。それは、ハンセン病の男性が身体を洗ってもらっているうちに、阿閦の姿を光明皇后に現すというものです。勿論この伝説には、他人の為に何かをする情け深い心を持とう

という教訓的側面もありますが、施浴という観念、そして仏教の物語の多くに関係するメッセージが含まれていることは、注目すべき点だと言えるでしょう。しかし同等に注目すべきは、寺湯では社会的階級が曖昧になり、ハンセン病患者と貴族が、僧侶と庶民が、そして神でさえも自由に入れる場所であった可能性を示唆している点です。

京都にある東寺真言宗の総本山、東寺（正式名＝教王護国寺）は、平均で一ヵ月に六回施浴を行い、最も知られている施浴の慣例があった場所です。弘法大師空海が別当として任命された時、彼の命により建てられた東寺の風呂は、一九五五年まで「お大師さんの湯」として続けられました。一般の市民が無料で入れる施浴の為に出資する人は、一回につき平均四百文を支払いました。寺湯はお風呂に浸かりに来る人にとっても出資する人にとっても全て、清めが出来る「ご利益のあるお風呂」という意味合いを持ちました。また東寺で最も頻繁だったのは、スポンサーなら、自分の先祖の命日に金を払ったり、施浴を受ける側は命日に合わせ風呂に入りに来ることでした。そうすればご利益があると思われていたのです。

それと対照に真言宗の醍醐寺の風呂は、庶民対象ではなく、後援者である貴族のみに向けて開かれていました。寺の二ヵ所、上醍醐と下醍醐には一一八三年、重源によって資金集めが行われた後に出来た、合計五つの鉄で出来た湯屋がありました。施浴という観念が、湯屋は社会的に平等であるという概念を推進したものの、醍醐寺の湯屋

の限定された性質と、僧侶の位や社会的に高い地位にいる人達の厳しい規則により、ここで新たな中世の入浴文化の性質が生まれました。寺院の入浴におけるこの新たな側面は、湯屋とは、僧侶と社会的階級制を抑制するよりも、その階級制を確立もしくは強化することとなりました。ここに東寺と醍醐寺が特に日本人の風呂文化にもたらしたであろう二つの側面があります。まず一つは「裸の付き合い」という言葉が示すように、入浴は人類としての人間をより親密にさせる場であること。もう一つは、家族や社会、性別、仕事関係の階級制がより強化される場であるということです。

公共の湯屋は、施浴の観念に基づき無料の風呂として始まりました。しかし戦国時代には、入浴料を取る傾向が出てきました。一度の入浴につき料金を支払うこともありましたが、家族が一日風呂を借り切る予約制度や、湯田地と呼ばれる一括払いもありました。この場合、入浴の代わりに土地を借り、その土地で出来た穀物を寺院に納めることになります。ささやかな金額の代わりに誰でも入れる寺湯を開くシステムの登場や、地元の役所の運営による銭湯の出現は、施浴の観念を弱めました。首藤善樹氏が議論しているように、その人気の高まりゆえ、寺の経済は寺湯の入浴料を取ることに依存するようになったのです。つまり、言い換えれば初期の概念にあった僧侶限定だった風呂が、誰でも入れる存在になったのです。寺院では、経済的に入浴料を取ることが必要不可欠になりました。薪を集めたり湯を作る湯那や湯維那、監

視役の湯奉行を含む湯方の部署のような、訪問者の為に湯を準備する担当に任命された修道院の位にあるさまざまな者の存在は、寺湯の商業化を証明しています。逆説的になりますが、清めの文化が仏寺から一般に広がる一方、日本の社会の根底で、入浴の宗教的修行の意味合いが弱くなっていきました。

清めの文化はまた、幾人かの僧達によって、癒しという新たな入浴の重要な要素と関連付くようになりました。真言宗や西大寺系列の叡尊や忍性などの僧侶は、厳しい戒律と社会での奉仕活動で知られています。奈良の新浄土寺などの幾つかの律宗寺院は銭湯として客に入浴料を取りました。しかし基本的に多くの律宗寺院では、お金が無く病気の人に対しては無料で施浴を行っていました。付け加えるならば、橋を建設したり貧しい人々に食べ物をあげる、仏教道の慈善活動に重きを置く医療サービスを施していたのです。北山十八間戸や鎌倉の極楽寺のように、僧侶が作った寺院の敷地内の病院や診療所の入浴施設は、清潔で治癒効力がありました。例えば極楽寺では忍性が、現在の医療センターの一貫として、特にハンセン病患者の為に、病院と薬草の入浴施設を建てました。このセンターは最高百五十人の患者を収容出来ましたが、治療を求めてやって来る患者の数は、いつもそれを上回っていました。その為、僧侶でありながら医師である彼らは、寺の本堂で治療を行っていました。

実は仏教と癒しは切っても切れない関係にあります。温泉文化に目を向ければ、その事実は日本の全ての温泉二

千ヵ所以上で見られるのです。

温泉の発見と仏教：癒しの文化

ここまでは、施浴の観念を通じた日本の風呂文化の広がりと、現実的問題として大規模な寺院では風呂を建設する為に、蒔を購入し設備を整えられる、経済的に余裕のある世帯をパトロンに持つ必要性があったと述べてきました。それゆえ、身体を洗い、ミネラルによって身体を癒せる温泉が地球から無料で涌き出たことは、仏からの贈り物だと人々が思ったとしても驚くことではないでしょう。実に日本におけるほとんどの近世以前の温泉発見伝というのが、超自然的な動物や鳥、温泉神、仏教の神に焦点が置かれているのです（薬師如来は癒しの仏の代表例ですが、その他にも地蔵や観音、不動なども存在します）。薬師堂がある、もしくは地元の温泉に奉納してある神社は、実質的に日本の全ての温泉で存在していると言えます。仏教において、入浴とは第一の柱が清めであるとするならば、第二の柱は癒しなのです。それが日本では、湯治という癒しの習慣に繋がったのでした。人々が治癒効力を期待し温泉につかるという証拠は、古代や中世でも見られることです。しかし温泉の為、大規模な旅行を長期間（七日間の湯治を三回行うのが、昔から薦められていたことです）行う湯治場は、徳川時代に発展しました。ほとんどの湯治場は「聖」と結び付き、前近代日本人は癒しを与えられたのでした。仏教の仏や神道の神だけでなく、僧侶も奇跡的な力を携えていると考えられていたので

した。

真言宗で最も良く知られている僧侶は、弘法大師空海でしょう。歴史的に知られている、弘法大師が実際に全ての温泉を発見したという話は恐らく信憑性が無いと思われるものの、「温泉発見伝」による、弘法大師が発見したと主張する温泉の数が最多だということは議論の余地がないでしょう。

ミッシェル・スワミエ氏（Michel Soymie）が中国の例を挙げ述べているように、仏教の僧侶と道教の仙人は往々にして、温泉源を言い当てる超自然的な力がありました。弘法大師のように仏教の僧侶にその傾向があったのは、恐らく前近世の時代に多くを旅する立場にあり、結果、山や水路について詳しかったからに他ならないでしょう。それはつまり、彼らが温泉や山に生えている薬草、その他の治療に効く自然に力に精通していたという事です。弘法大師が発見されたと言い伝えられている全ての温泉は、実は彼が発見したのではなくとも、真言宗や山伏達が土地の地理に詳しくなったと考えるのは、恐らく可能なことでしょう。そして彼らが地面のどこから温泉が涌き出ているかを発見した時、発見者を自分が信じる宗派の創始者の名にしたと考えられます。温泉縁起、または温泉発見伝の多くが室町時代後期と徳川時代前期に作られたのと、社寺縁起が作られたのは大体同じ頃です。どちらの縁起にも、名の知られた僧侶が発見者や創始者となるというパターンが見られます。

言い換えれば、これらの縁起が歴史的に真実かどうかはさておき、重要なのは温泉や井戸、飲料用の水源は弘法

大師によって発見されたとされていることです。この発見伝により、いかにして水源を発見して使うかを教えられた、東寺の苦しんでいた人々や水不足の地域全体が感動したのです。そして彼らはその思いを、弘法大師をモチーフとして伝えたのです。弘法大師橋の建設や現在で言うところのダム建設などに関わる技術に精通していました。また腹痛の薬で、高野聖によって全国に広められた陀羅尼助（だらにすけ）などの漢方を考案するなど、医療にも詳しかったのです。つまり彼は、癒し効果のある温泉の発見者としては、完璧な人物像であったという事です。

治癒効力のある温泉の発見伝が、宗派を特定しているのは特別驚くべきことではありません。弘法大師の例で言えば、最も有名なのは伊豆半島にある修善寺温泉でしょう。伝説によれば、町の真ん中にある独鈷（どっこ）の湯は、井戸を掘る時に弘法大師が自分の独鈷（金剛杵（こんごうしょ））を使用した事から、その名が付けられました。現在も川べりに混浴露天風呂として入れる独鈷の湯。弘法大師の伝説の多くは、錫杖もしくは秘密の道具としての独鈷を中心に描かれています。独鈷には水がない場所に水を、もしくはただの水を治癒効力のある水に変える奇跡的な力が込められているのです。修善寺の温泉の場合、重病である父親を治す為に、冷たい川の水で父の身体を洗う子供が川岸にいました。感動し、助けたいと思った弘法大師は、錫杖（しゃくじょう）を使い川の水を温かな治癒効力のある水に変えました。そしてその水でどうやって看護をすれば良いか教えてみたところ、父親はすぐに治りました。

「独鈷の湯」は最も古くからある温泉で、修善寺温泉の大元の源泉として知られていて、「秘湯」の良い例になるでしょう。

仏教の寺院が管理しているこの種の温泉は、有馬温泉、渋温泉、城崎温泉、龍神温泉、日光山温泉など、日本に数ある温泉寺の現象として見られます。(脚注13) 長野にある渋温泉は、伝説によると弘法大師が創始しましたが、曹洞宗の寺が温泉源を管理しています。武田信玄がスポンサーだった渋の温泉寺は、現世と来世に渡ってご利益があった寺として有名です。上に挙げた他の温泉のように、現世利益(げんせりやく)のような治癒効力のある水としても機能します。特に刀で切り傷を負ったり怪我をした信玄の兵達が、現在は「信玄の釜風呂」として知られる寺院の薬草風呂に入りに来ました。その一方で、傷が深刻で亡くなった兵達を来世供養する為、この寺は遺体を埋葬し菩提の供養を行う場所としても、地元で知られるようになったのです。

真言宗や他の宗派が日本の風呂という慣習に与えた影響を、正確に細かく説明することは大変難しいことです。影響はあちらこちらに広がっているからです。しかし長い歴史の中で、独鈷、まんだら、陀羅尼などの真言宗の用語と儀礼、それから弘法大師などの真言宗の僧侶が、日本の風呂文化の中で清めと癒しという概念を普及させたことは間違いありません。